



北海道ブロックにおける HIV感染症の医療体制の整備に関する研究

研究分担者 豊嶋 崇徳

北海道大学大学院 医学研究院 内科系部門内科学分野血液内科学教室 教授

研究協力者 遠藤 知之

北海道大学病院 感染制御部 教授

研究要旨

北海道ブロック内の患者動向や各拠点病院の診療実績、活動状況について分析を行った。また、北海道ブロック内でのHIV診療に関する研修会等を開催し、北海道内のHIVの診療水準の向上を図った。2025年の北海道ブロック内の新規HIV陽性者/AIDS患者数は30名であり、2年連続で減少した。年齢別では20歳代の若年層が最多であった。最近2年間の北海道大学病院の新規患者のうち21.3%が外国人であり多言語対応等の体制整備が必要であると考えられた。

行政の協力も得て運営している北海道の各HIV診療ネットワーク（透析・歯科・福祉サービス）は患者の早期受け入れに一定の役割を担っており、今後も行政と協働して北海道におけるHIV医療体制の整備を推進していく予定である。

A. 研究目的

北海道ブロックのHIV感染症の診療水準の向上およびHIV陽性者の早期発見・受け入れ施設の拡大を目的とした。

<倫理面への配慮>

アンケート調査や研修会でのデータ解析、症例提示においては、患者個人が特定されないよう配慮した。

B. 研究方法

北海道ブロック内の拠点病院に対してアンケート調査を実施し、患者動向、診療実績および活動状況について分析を行った。なお、これらの調査は北海道との共同で行った。

北海道内の医療者を対象にHIV/AIDS医療者研修会および職種別研修会を開催し、診療水準の向上を図った。

北海道内の医療関連機関におけるHIV感染症の早期発見・偏見の解消を目的として開催してきた出張研修を継続して実施した。出張研修の研修効果の検証として、出張研修の前後で、HIV陽性者の診療・ケアに対する意識に関するアンケート調査を実施した。

行政と連携して、受け入れ施設拡大を目的とした各診療ネットワーク（歯科・透析・福祉サービス）の充実を図った。

C. 研究結果

1. 北海道ブロックの患者動向および検査件数

2025年12月末現在の北海道ブロックにおける新規のHIV/AIDS患者数を図1に、年齢区分別患者数を図2に示す。新規のHIV陽性者は25名、AIDS発症者は5名、計30名であった。年齢区分では、男性29名中20～29歳が11名であり最も多かった。女性は1名で20歳未満であった。北海道の保健所等におけるHIV抗体検査件数を図3に示す。2025年の検査件数は1,885件であった。

2. 北海道ブロックの各拠点病院の診療状況

北海道内の各拠点病院のHIV/AIDS患者の診療状況を表1に示す。現在患者がいない施設が4施設あり、これまでにHIV/AIDS患者の診療経験が全くない拠点病院は2施設であり、昨年度と同様であった。地域別患者数は、道央・道南地区が81.1%

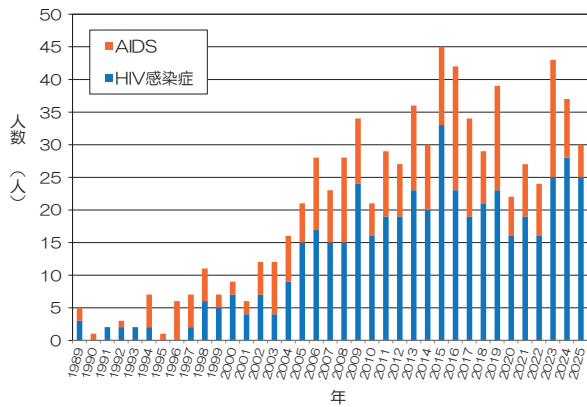


図1 北海道における新規 HIV/AIDS 患者数

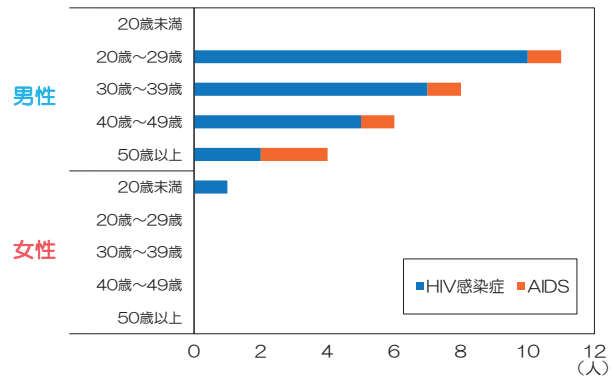


図2 北海道における年齢区分別患者数（2025年）

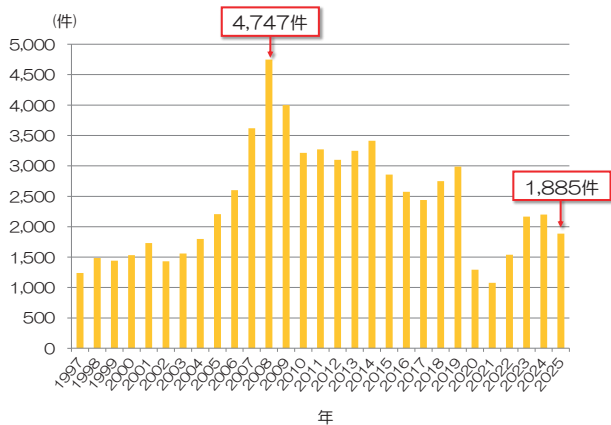


図3 北海道の保健所等における HIV 抗体検査件数

表1 北海道ブロックの拠点病院別患者数

	25/24/23 (年度)	累計	現在数		25/24/23 (年度)	累計	現在数
北海道大学病院	5/30/39	652	413	【道北・オホーツク地区】			
				旭川医大病院	2/5/3	63	37
				旭川医療センター	0/0/0	3	0
【道央・道南地区】				市立旭川病院	0/0/0	24	14
札幌医大病院	4/8/8	169	104	旭川赤十字病院	0/0/0	0	0
市立札幌病院	0/3/6	61	39	旭川厚生病院	0/0/0	3	1
北海道がんセンター	0/0/0	3	1	北見赤十字病院	1/2/2	28	16
北海道医療センター	0/1/0	7	0	広域紋別病院	0/0/0	3	3
市立小樽病院	0/0/0	3	3	【道東地区】			
市立函館病院	0/7/1	55	26	釧路労災病院	2/0/1	53	29
北海道立江差病院	0/0/0	0	0	市立釧路病院	0/0/0	3	3
				釧路赤十字病院	0/0/1	4	4
				帯広厚生病院	2/5/3	56	30

2025年7月現在

と最も多く、道北・オホーツク地区が9.8%、道東地区が9.1%であった。また、道内全体の57.1%の患者が北海道大学病院に通院していた。

北海道大学病院のHIV患者数の推移を図4に示す。2025年は、転居を含む当院の新規患者は31名で、累計670名となった。また、2025年12月末時点での定期通院患者は438名となった。過去2年間の当院の初診患者61人のうち外国人は13人(21.3%)であった。

3. 北海道ブロック内の研修会等の開催状況

【北海道ブロック内研修会・協議会の開催】

- 北海道HIV/AIDS医療者研修会、2025年6月21日
- 道東地区エイズ拠点病院等連絡協議会、2025年7月5日
- 北海道エイズブロック拠点病院HIV/AIDS看護師基礎レベル研修、2025年7月14日～7月15日
- 道央地区エイズ拠点病院等連絡協議会、2025年9月12日

- 道央圏HIV感染症セミナー、2025年9月12日
- 北海道エイズブロック拠点病院HIV/AIDS看護師研修会、2025年10月18日
- 北海道ブロック拠点病院HIVカウンセラー専門職研修、2025年10月18日
- 北海道ブロック拠点病院HIVソーシャルワーカー専門職研修、2025年11月8日
- 道北・オホーツク地区エイズ拠点病院等連絡協議会、Web開催、2026年1月30日
- 道北・オホーツク地区研修会、Web開催、2026年1月30日
- 北海道HIV/AIDS歯科医療研修会、Web開催、2026年1月31日

【北海道大学病院内研修会】

- 北海道大学病院HIV学習会
医療端末からオンデマンドで視聴できる可能な学習動画を改訂した。各動画の視聴回数を以下に示す。
 - ・動画1.HIVの基礎知識: 250回
 - ・動画2.HIV感染症の治療と予後: 84回

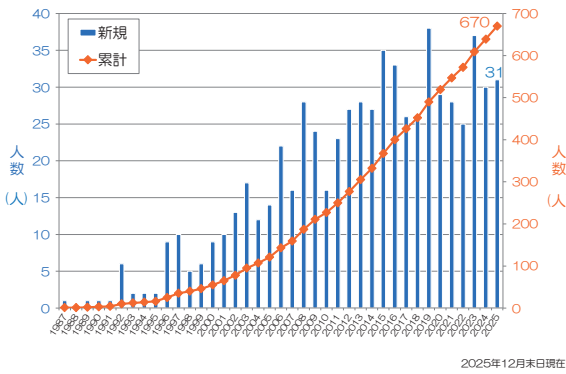


図4 北海道大学病院における患者数の推移



図5 令和7年度HIV出張研修
フライヤー

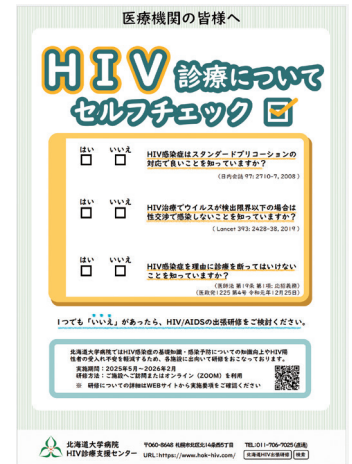


図6 HIV診療について
セルフチェック

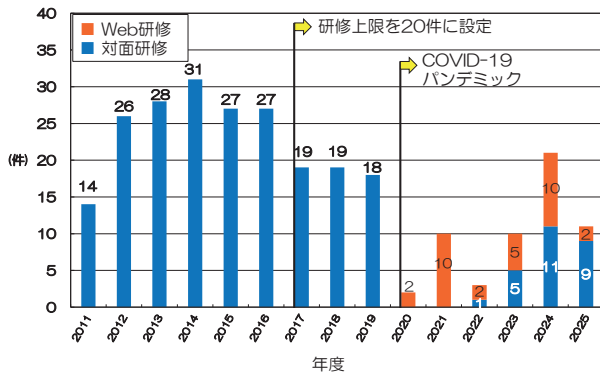


図7 出張研修開催件数

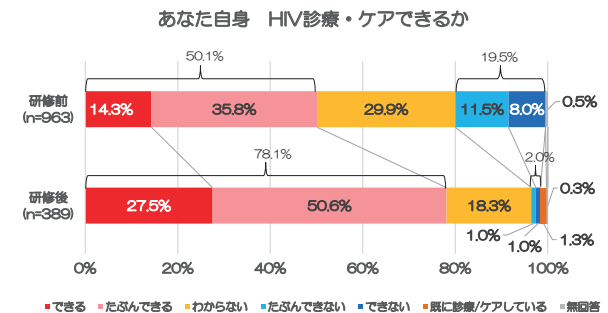


図8 2025年度出張研修アンケート結果

- ・動画3.HIV感染症の動向: 77回
- ・動画4.HIVによる針刺し切創・体液曝露時の対応: 84回
- ・動画5.薬害エイズとブロック拠点病院の役割: 76回

●院内出前研修

1回（リハビリテーション部）

【北海道大学病院 出張研修】

今年度は図5に示したような出張研修の案内パンフレットを作成し、行政を通じて北海道内の医療機関、介護福祉施設、居宅サービス事業所、保健所など約18,000施設に配布した。また、HIV陽性者に対する診療拒否を減らす取り組みとして、昨年度に引き続き本年度も出張研修の案内に加え、医療機関に対しては、図6に示したような「セルフチェック」のパンフレットを同時に配布した。研修方法は、対面またはWebでの研修を選択できる体制としたところ、対面希望が9件、Web研修希望が2件であった（図7）。

●札幌市内: 9施設（訪問開催7施設、Web開催2施設）

札幌市外: 2施設（訪問開催2施設、Web開催0施設）

研修前後に行った参加者へのアンケート調査結果を図8に示す。「あなた自身、HIV診療・ケアができますか？」という質問に対して、研修前には「できない」「たぶんできない」という否定的な回答が19.5%で、「できる」「たぶんできる」という肯定的な回答が50.1%であったが、研修後には、否定的な回答が2.0%まで減少し、肯定的な回答は78.1%に増加した。

4. サークルさっぽろ受検状況

札幌市では2007年より、行政（札幌市）、はばたき福祉事業団、ブロック拠点病院が協働して、「サークルさっぽろ」という無料・匿名のHIV検査・相談所を運営している。2025年の受検者数は524人であった（図9）。

表2 北海道HIV福祉サービスネットワーク登録施設

- 登録施設：92施設（2026年1月1日現在）
- 紹介可能施設：720施設（2026年1月1日現在）

入所サービス	
高齢者下宿・高齢者専用賃貸住宅・サービス付き高齢者向け住宅	25件
福祉ホーム・療養介護・医療型障害児入所施設・入所施設支援	7件
グループホーム	36件
有料老人ホーム	12件
介護老人福祉施設・地域密着型特養	20件
介護老人保健施設	1件
ケアハウス・養護老人ホーム	6件
訪問サービス	
訪問看護・訪問介護・予防訪問介護・小規模多機能型居宅介護・定期巡回・随時対応型訪問介護看護・夜間対応型訪問介護・同行援護・行動援護・他	271件
訪問入浴	1件
就労系サービス	
就労継続支援A型・B型事業所	30件
就労移行支援事業所・就労定着支援	16件

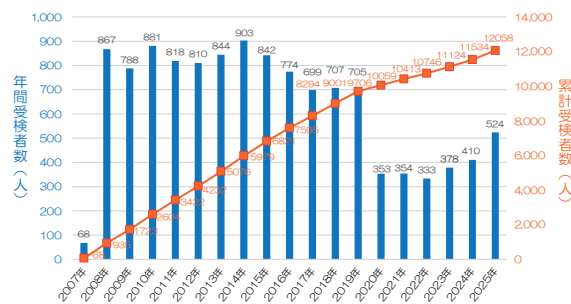


図9 HIV検査・相談室サークルさっぽろ受験者数

- 登録施設 69施設（2026年1月1日現在）

* うち26施設で出張研修を施行

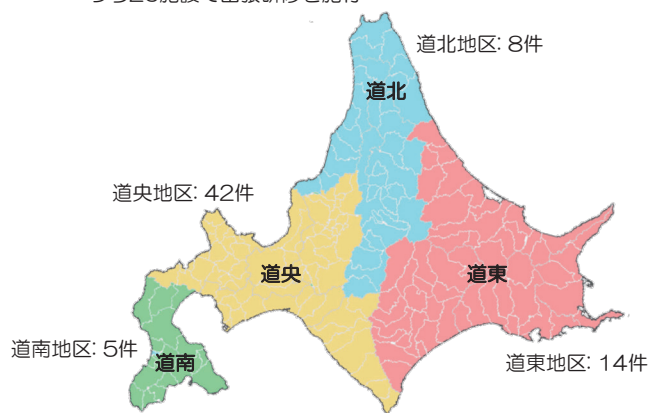


図10 北海道HIV透析ネットワーク

5. 北海道HIVネットワーク参加状況

- 北海道HIV 歯科ネットワーク：57施設，前年比：-1件
- 北海道HIV 透析ネットワーク：69施設，前年比：±0件（図10）
- 北海道HIV福祉サービスネットワーク：登録施設：92施設，前年比：-1件，紹介可能施設：720施設，前年比：+3件（表2）

D. 考察

2025年の北海道ブロックの新規HIV陽性者/AIDS発症者数は30名であり、2023年から2年連続で減少していた（図1）。これまで、減少傾向から増加傾向に転じたことも度々あるため、今後の推移を注視する必要はあるが、2025年のAIDS発症率は過去20年間で最低であり、早期診断が進んでいる可能性が示唆された。年齢別では、これまで30歳代～50歳代が最も多かったが、今年度は20歳代が

最も多かった。特に、保健所や郵送検査などによりAIDS発症前に見つかる症例が多く、若年層にはHIV検査がある程度浸透してきている可能性が示唆された。一方で、50歳以上では、半数がAIDS発症でHIV感染が判明していることから、幅広い層に対する啓発活動が必要であると考えられた。保健所等におけるHIV抗体検査件数は、コロナ禍中の減少後、徐々に回復してきていたが、2025年は減少に転じていた。（図3）。一方、サークルさっぽろでは、今年度からHIV検査に加えて梅毒検査も同時にできる体制としたところ、受験者数の増加がみられた（図9）ことから、検査体制の工夫により受験者数の増加を図ることが可能と考えられた。今後は受験者の利便性を考慮した郵送検査の推進なども考えていきたい。今後も様々な取り組みにより検査数の拡大を図っていく予定である。

北海道内の拠点病院の診療実績にはここ数年大きな変化はなく（表1）、多くの患者はブロック拠点

病院に通院していた。特に、北海道大学病院の定期通院患者数は、年々増加し2025年末で438名となった。2025年に改定となったエイズ予防指針においても「全ての医療機関、介護施設等で、感染者等に対しての診療やサービスを提供することが可能である」と明記されているように、今後はより幅広い施設でHIV診療が可能となる体制を整えることが必要であると考えられた。

コロナ禍以降、外国人の受診者が増えてきていたが、過去2年間の当院の初診患者の21.3%が外国人であった。今後も多国籍の外国人陽性者が増加することが見込まれるため、多言語への対応としてAIツールを積極的に利用するなどの対策が必要と考えられた。

2011年から継続して行っている出張研修は、コロナ禍を契機としてWeb研修を導入し、現在は研修施設の希望に応じて、対面またはWeb開催のいずれかを選択できる体制としている。コロナ禍直後はWeb開催希望が多かったが、本年度は11件中9件が対面研修希望であった。対面研修では、研修後に個別の質問を受けることが多いことから、研修施設のニーズを考えると、今後も対面での研修が増えていくものと思われた。本年度の依頼件数は11件であり昨年度よりも少なかったが、研修前後に行っているアンケートの結果（図8）からは、例年通り意識の大幅な変化がみられたことから、出張研修による一定の効果が得られたと考えられた。

北海道では、歯科・透析・福祉サービスに関するHIV診療ネットワークを構築しており（図10、表2）、これらの領域においてHIV陽性者の紹介を円滑に進めるための一助となっている。この1年は、登録数に大きな変化はなかったが、閉院や担当スタッフの異動などにより、登録を取り下げた施設も出てきているため、今後も登録施設を増やすための継続的な取り組みが必要と考えられた。今後も行政と連携してネットワーク拡大を図っていく予定である。

E. 結論

Webによる研修会や、行政との連携を通じて、北海道ブロックのHIV感染症の診療水準の向上に一定の成果が得られたと考えられた。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 遠藤知之、後藤秀樹、松川敏大、荒隆英、長谷川祐太、須藤啓斗、宮島徹、永井惇、豊嶋崇徳: 2剤療法施行中のHIV陽性者におけるBlipおよびTarget Not Detected (TND) 維持率の検討、日本エイズ学会誌 27: 56-63, 2025
- 2) 吉田繁、佐藤かおり、藤澤真一、岩崎澄央、遠藤知之、豊嶋崇徳、松田昌和、今橋真弓、蜂谷敦子、岡田清美、齊藤浩一、奥田美那子、加藤眞吾、林田庸総、椎野禎一郎、西澤雅子、杉浦互、吉村和久、菊地正: プロテアーゼ、逆転写酵素、インテグラーゼを対象としたHIV薬剤耐性検査試薬キット、HIV-1 Genotyping Kit with Integraseの性能評価、日本エイズ学会誌 27: 69-78, 2025
- 3) 松川敏大、遠藤知之、森木朝子、永井惇、宮島徹、長谷川祐太、荒隆英、後藤秀樹、豊嶋崇徳: AIDS患者の髄液病原体網羅的解析を目的としたマルチプレックスPCRの有用性についての検討、日本エイズ学会誌 27: 147-153, 2025

2. 学会発表

- 1) 遠藤知之、田澤佑基、新井崇之、後藤秀樹、松川敏大、荒隆英、長谷川祐太、長井惇、森木朝子、高橋知希、後藤了一、嶋村剛、原貴信、曾山明彦、江口晋、豊嶋崇徳: 大量失血を伴う手術時におけるレナカパビルの血中濃度推移の検討 第39回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2025年12月5-7日
- 2) 松川敏大、遠藤知之、長谷川祐太、高橋知希、森木朝子、長井惇、後藤秀樹、豊嶋崇徳: HIV感染者における悪性腫瘍の発生率と予後 第39回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2025年12月5-7日
- 3) 菊地正、西澤雅子、林田庸総、湯永博之、豊嶋崇徳、吉田繁、伊藤俊広、古賀道子、長島真美、貞升健志、佐野貴子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂寛、渡邊珠代、今橋真弓、松田昌和、重見麗、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊大、阪野文哉、川畑拓也、藤井輝久、高田清式、末盛浩一郎、中村麻子、南留美、松下修三、仲村秀太、小島潮子、Lucky Runtuwene、椎野禎一郎、吉村和久、杉浦互: 2024年の国内新規診断未治療HIV感染者・AIDS患者における薬

剤耐性 HIV-1 の動向 第39回日本エイズ学会学
術集会・総会、熊本、2025年12月5-7日

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし